一

その夜、激しい雨が江戸の町を襲った。それまでの暑さを吹き飛ばすような勢いで、大川の水位も急激に上がった。

磐音は金兵衛長屋の布団の中で、

（明日の朝はどうしたものか）

と傘がないことを考えていたが、幸いなことに明け方には豪雨もやんだ。そこで裾端折りにして、歯のちびた下駄を履いて宮戸川に鰻割きに行った。

この朝は、仲間の次平じいさんが神経痛とかで仕事を休んだ。

鉄五郎親方が、

「俺が手伝おう「

と言ってくれたが、

「松吉さんと二人でなんとかなります」

と申し出を断り、何百匹もの鰻と格闘した。

そのせいで、朝餉を馳走になって宮戸川を出たのは、いつもの朝よりも半刻ほど遅かった。

（さて湯屋に行くか）

磐音は近頃では宮戸川の帰りに朝湯に行くのが楽しみになっていた。

六間堀に出ると、鰻捕りの幸吉が同じ年頃の娘と４つくらいの男の子を連れて立っていた。

ふっくらした頬が愛らしく、しっかり者の顔をした娘だった。

男の娘は涙の痕を頬に残し、瞼を腫らしていた。今は泣き疲れて放心したほうな顔付きだ。

「浪人さん、俺の借りの始末をつけてくれたばかりのところでよ、ちょいと気が引けるが、相談があらあ」

幸吉は真剣な顔で言った。

「どこぞ静かなところを知らぬか」

磐音は体に染み付いた鰻の臭いを気にしながら言った。

幸吉と娘が小さな声で話し合い。

「泉養寺の境内ではどうだい。あそこなら静かだぜ」

幸吉は男の子の手を引いた娘を従えて、磐音と肩を並べて六間堀の東側へと入っていた。すると唐人飴売りがつおい日差しにうんざりしながら、やってきた。

「飴をくれぬか」

磐音は一つ三文の飴玉を３つ買って、幸吉に与えた。

「気を遣わせちまってすまねえな」

幸吉はそう言うと後ろから歩いてくる二人に大粒の飴を渡し、自分も口に放り込んだ。

十二歳のコウキチは磐音が深川住まいを始めたときからの師匠だ。時折り仕事を世話してくれる幸吉には頭が上がらない。

「幸吉どののことだ、何でも命じてくれ」

「なら、頼まあ」

と言った幸吉は、後ろを振り向いて娘に頷いてみせた。

「おそめちゃんはな、おれの幼馴染でよ、唐傘長屋の住人だ。手を引かれてる男の子はおそめちゃんのお父っつぁんの知り合いの子で、豆造というんだ」

幸吉は豆造のことをよくしらないらしい。

「豆造のお父っつぁんの弓七さんは鍛冶職人だが、三度の飯より博奕が好きでよ、家族を泣かしてきたと思いねえ。本所深川あたりにはよく転がってる話だ」

と言った幸吉に後ろから声が飛んだ。

「そんなに転がってる話では困るの」

「そい言うなって、おそめちゃん。これもよ、話のきっかけというもんだぜ」

そう幸吉が答えたとき、四人は寺の門前に来ていた。

石の柱には、神明社地別当泉養寺と刻まれてあった。

四人は山門を潜り、蝉時雨が降り注ぐ本堂の階段に座った。さほど大きくはないが、古色蒼然とした佇まいだ。それに辺りには人の気配もなく、話をするにはもってこいの場所だ。

磐音と幸吉が階段の上に座り、おそめと豆造がちょっと離れた下に並んで腰をかけた。飴を口にいれているのは、幸吉と豆造だけだ。

「二十日ほど前に豆造のおっ母さんが長屋から姿を消したんだ。いや、行った割きは、分かってる」

「実家にでも戻られたか」

「吉原に身売りしたんだよ」

と幸吉は抑えた声ながら、吐き捨てた。

「弓七さんが作った借金は、五十両を超えていたそうだ。鋏を造る鍛冶職人がよ、一生かかっても返せねえ大金だ。なんとも馬鹿な野郎さ」

幸吉は言い放った。

「豆造のおっ母さんのおしずさんは、まだ年も十九と若い上にちょっとした美人だとよ。それに目をつけたのが、賭場の胴元らしいや。厳しい取り立てに悩んだ末におしずさんは、吉原に身を沈めることにしたんだと」

「なんとのう」

「それに比べてよ、男はだらしねえや。弓七の野郎、仕事もしねえで、一日じゅうねそめそして飲み暮らしてるらしいぜ」

「幸吉さん、話を進めて」

「あいよ」

幸吉はおそめに催促されて、

「問題は豆造だ。まともに飯も食えねえってんで、長屋の人たちも面倒を見てきたが、どこもがじぶんちが生きるのに必死だ。ともかくよ、弓七さんがおそめちゃんのお父っあんの仕事仲間ということもあって、唐傘長屋に引き取られたんだ。ところがよ、夜中になると、めそめそ泣きやがるんだ。二軒隣のおれんちにも聞こえてくるんだぜ」

「そんなこといわないの、幸吉さん」

「おそめえちゃん、おめえたちはよく眠れるな」

「寝てなんかいないわよ。でも仕方ないでしょ」

「幸吉どの、身請けの金をと言われてもちと困る」

言わねが先回りして言うと、

「呆れたぜ。どこのどいうつが貧乏浪人に五十両、六十両もの金を貸せって申し込むもんか。そんな馬鹿がいたらお目にかかりてえや」

「それもそうだな」

「話の腰を折らないでくれよ」

「ならば、それがしに相談とはなんだな」

「吉原に行っておしずおばさんに会ってほしいんです」

「吉原じゃと！」

「なんでえ。そんなでけえ声を出すなよ。いくら浪人でもよ、度くらいは大門を潜ったことがあるんだろ」

幸吉は口を揃えた。

「待ってくれ。吉原に行ってそれがしに何の話をしろとういのだ」

「そこだ。おそめちゃん。はなしてくんな」

幸吉はおそめに話を振った。

「弓七おじさんをようやくつかまえて、豆坊が泣き止む方法はないかと訊いたんです。そしたら、おしずおばんさんの匂いがついたものなんてなにもありません」

「弓七が古着屋に叩き売ったのさ」

「話は分かった。だがな、それができるとしたら、亭主の弓七どのだけだぞ」

「ちぇっ。その亭主が当てにならねえから、こうして頼んでるじゃねえか」

今朝の幸吉はいらいらしている。

「幸吉さん、お願いしているのにそんな口に利き方はないわよ」

とおそめからも注意をされた。

「すまねえ、浪人さん。だけどよ、こればっかりは子供のおれたちじゃあ、なんともできねえんだ」

言わねはしばらく思案した後、

「それがしがまず弓七どのに会ってみよう。その上で弓七どのがおしずどのにあってくれというのなら、吉原に参ろう。それでどうだ」

と提案した。

幸吉とおそめあ顔を見合わせ、頷き合った。

「今晩にもと思ったがそうはいかねえか」

幸吉が納得するように言い、おそめがべこりと頭を下げた。

「ところで弓七どのの長屋はどこかな」

「深川元町の裏長屋、藤兵衛さん家作です。でも、長屋を訪ねてもいないと思います。一番いいのは、夕方、仙台堀の煮売り酒屋の赤木屋を訪ねることです」

「そこへ毎晩行ってよ、職人仲間に酒をたかってるんだと。豆造のお父っつぁんはよ」

幸吉が欠伸しながら言い放った。

豆造の夜泣きでだいぶ眠っていないらしい。

「幸吉どの、それがしを赤木屋に案内してくれぬか」

「夕刻、長屋に迎えに行くぜ」

と幸吉が請け合い、

「なっ、おそめちゃん。この浪人さんはおれの行くことなら何でも聞いてくれるだろう」

とおそめに胸を張った。

「幸吉さん、お侍さんに失礼よ。金貸しの権造親分がおみつちゃんを連れて行こうとしたときだって、助けてくれたわ。お侍さんは、誰にも親切なのよ」

「あのときだって、おれが頼んだから動いてくれたんだぜ。なあ、浪人さんよ」

「おそめちゃん、幸吉どのはそれがしの師匠のようなものでな、頭が上がらぬのだ。そなたに幸吉どのが頭が上がらぬようにな」

「まあっ！あたし、そんなに怖くありませんっ」

おそめがふくらした頬を膨らませた。

磐音は階段から立ち上がりながら、

「とにかく夕暮れに会おう」

と幸吉に言い残すと、泉養寺を出た。

磐音が六間湯で長湯して長屋に戻ると、水飴売りの女房のおたねが、

「浪人さん、お客さんが長いこと待ってるよ」

と井戸端から怒鳴って教えてくれた。

「うちに、客がな」

思い当たるとしたら、今津屋か、関前はんの人間だ。そんなことを考えていると、磐音の長屋の戸口から早足の仁助が顔を覗かせた。

「おおっ、そなたか。待たせたようだな」

仁助がぺこりと頭を下げた。

「昨日、お殿様の参府行列が無事に江戸藩邸に到着してございます」

と言った。

「おおっ、ご到着になったか。それはなにより」

「つきましては、目付頭の東源の丞様が坂崎さんまにお目にかかりたいと待っておられます」

「急ぎのようだな」

「はい。できることなら、この足で」

手にぶら下げていた手拭いを長屋に放り込むと。

「案内してくれ」

と言った。

仁助は頷くと、溝板を踏んで木戸口を潜った。

金兵衛が糸瓜棚の傍らに立っていた。

今日はどてらを着ていないところを見ると、風邪も良くなったのか。

「本日も暑うござるな」

「昨夜の大雨が嘘のようだねえ」

金兵衛に見送られて大川に向かった。

仁助は異名の早足で新大橋を渡ると、大川の右岸に沿って上流へと案内していった。今日の流れは昨夜の豪雨を湛えて滔々と流れていた。

「もうすぐでございます」

そう言った仁助の視線が薬研堀を見ていた。

薬研堀は元々、幕府のお米蔵に出入りする船のために掘られた入り堀だ。

二年前の明和八年に堀の大半は埋め立てられたが、河口部分だけが残って、そこに柳橋がかかっていた。

地の利のよい薬研堀界隈は医師が多く住んでいた。また近くに白酒商う大黒屋、恵美須屋の二軒があって、売上を競っていた。

薬研堀不動のかたわらに小粋な水茶屋が何軒か、看板を上げていた。

早足の仁助が連れていったのは、そのうちの一軒、涼風だ。

「こちらでお待ちにございます」

仁助は店先でお上に磐音を託すと、自分は供部屋に下がった。

磐音が案内されたのは、二階の堀が見渡せる座敷だ。そこに豊後関前藩の目付頭、東源の丞野顔は日に焼けていた。

「参府で江戸入りなされましたか」

磐音は訊いた。

「殿の供で江戸に上がって参った。江戸は十年ぶりかな」

そう言った源の丞は、ぼんぼんと階下に向かって手を叩いた。

「そなたが関前を去って以来、気が抜けたようになってな、磐音はどうしておるかと中戸先生と言い暮らしてきた」

まだ色香を漂わせた女将が自ら膳を二つ運んできた。が、そう言いつけられているのか、黙って下がった。

「まあ、一献いこうか」

源の丞は磐音に杯を満たした。

「壮健でなによりであった」

「東様にも」

磐音は当たり障りなく言葉を帰した。

二人は互いの顔を見ながら、酒を飲んだ。

「そなたが用心いたすのは分かる。わしにそなたのことを教えてくれたのは、中居半蔵どのだ」

「お会いになられたのですか」

「保土ヶ谷宿で会うた」

「中居様は江戸に戻られましたか」

まず気にかかることであった。

「中居様は国許に発たれた」

「国表に、ですか」

「そなた宛ての手紙を何通か託されて参った、後で渡す」

と東源の丞は言った。

何通とは、だれからの手紙か。

「国表の出来事、そなたの父上正睦様が蟄居閉門されたという異変も中居様から知られされた」

源の助は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「いくら中興の祖とは申せ、宍戸文六様の所業、目に余る。まして、殿が参府に立たれた隙を狙って事に及ぶなど、言語道断じゃ」

源の丞の額に青筋が立った。

「真実、そう思われますか」

源の丞は磐音の顔を寂しげに見返した。

「東様、御番の辻の一件以来、私は人を新字られなくなっております。東様は、宍戸派でないとどうして言い切れますか」

「そんたの気持ちもわからぬではない。河出舞どのの不義の噂話に始まり、そなたら、三人の斬り合いでの決着が、ひょっとしたら国家老どのの策略ではないかとわしが感じ始めたのは、そなたが暇状を藩に提出して、関前城下を抜け出たあとのことだ。守旧派の連中が大手を振って歩き出した。藩の財政を改善されようとするそなたの父上らは、藩政から遠ざけられていった……」

源の丞は汗が噴き出した顔をつるりと手で拭った。

「わしは宍戸文六殿の腰巾着、お勤方の鈴木丸三郎を役所に呼んで脅かしつけたのじゃ。いやなに、鈴木丸が御用の金をくすねている証拠を掴んでいてな、いつか時が来たれば使おうと思っていたのよ。鈴木丸もなかなか白状しなかったが、公金横領の罪で裁きの場に出すぞと脅かしつけたら、知っておることを話しでした。それによれば、舞どのの噂に始まる騒ぎはすべて、そなたら、藩財政を改革しようとする若手を潰すために仕組まれた企てということが分かってきた。だがな、そなたも知ってのとおり、長年、藩政を牛耳ってきた宍戸派は、どこにでも目を光らせておる。鈴木丸三郎も、おれが釈放したその夜に殺されよったわ」

「なんということを」

「坂崎、豊後関前に巣食う虫は、簡単なことでは退治できぬ。わしが殿に直訴して参府の行列の加えてもろうたは、江戸の同士と話し合う必要があると思うたからじゃ。そのような気持ちを抱いて江戸に入ろうとした保土ヶ谷宿に、中居半蔵様が見えられた。むろんお忍びでな……」

源の丞はそう言うと、小さく息をついた。

「そなた宛の手紙を渡そう。それを読んでもらうのが、先決じゃ」

源の丞は部屋の片隅に置いてあった油紙の包みをもってくると、

「不運な目にあわれる前のそなたの父上の手紙も入っておる」

と包ごと渡した。